

2020年5月23日発行

FPC Commentary Vol. 10

日本人の気質に由来する非常事態時の脆弱性 —「空気」による支配の観点から

外交政策センター研究員 吉木 誉絵



非論理的な「空気」による決定がもたらす禍

新型コロナウイルスによる危機は、日本という国家の脆弱性を改めて浮き彫りにしました。本稿では、日本という共同体の集団的弱点を、日本人の持つ性質と結びつけて論考するものです。

国家の非常事態に、安倍首相をトップとする日本政府の対応は、一定の成果はあるものの、他国と比較しても迅速性に欠け、後手に回り、場当たり主義にみえます。そんな政府の対応に疑問を持つ人も少なくありません。しかし、それは今回に限ったことではありません。これまでも、例えば東日本大震災の原発事故を巡る対応においても、当時の与党であった民主党政権のトップである菅直人首相によって幾度となく繰り返された、場当たりの危機管理態度を原因とする、現場を混乱させるような政府の対応に非難が集中しました。安倍政権による新型コロナウイルスへの対応も、菅政権による東日本大震災を巡る政権運営も、どちらも大局的視野を欠き、近視眼的で、行き当たりばったりの政策が目立ち、非論理的な行動が顕著です。

このような政府の態度は、先の大戦においても随所にみられた態度であり、それは『失敗の本質』（戸部良一他）でも具体的に述べられていますが、要するにノモンハンから沖縄戦までの作戦の立案から実行まで、至るところに見られた傾向だといえます。また、山本七平はそのような具体例として、沖縄戦の際に、連合艦隊司令部が戦艦「大和」を特攻出撃した背景を挙げ、「大和」の海上特攻への参加が当然と判断された根拠は、なんとその場を支配していた「空気」だと指摘します。

「空気」による決定とは、情緒的であり、合理性を欠いた行き当たりばったりの決定であり、科学的根拠に基づかない

究極の非論理的な決定方法だといえます。過去に、日本は戦争という国家の存続をかけた究極の事態においても、そのような決定手段が用いられていました。そして、そのような傾向は、現代の国家運営においても散見されます。そして、今回の新型コロナウイルスへの政府の迅速性を欠いた成り行きまかせに見える対応も、「空気」の支配とは無縁ではないかもしれないのです。

つまり何が言いたいかというと、トップが誰であろうと、政権がいくら交代しようとして、時代がいくら変わろうと、もっと根深いところに存在している日本の構造的、本質的な弱点を克服しなければ、今後も同じことを繰り返す可能性が極めて高いということです。

「疑似西欧的な論理」を纏った明治維新以降の日本

では、そもそも「空気」とは何でしょうか。よく「空気を読む」などと使用されますが、これは暗黙に共有されている一種の前提のもとに日本人が生きていることを意味します。山本七平は『「空気」の研究』の中で、「ほぼ絶対的な支配力をもつ『判断の基準』であり、それに抵抗する者を異端として、『抗空気罪』で社会的に葬るほどの力を持つ超能力（22頁）」であると言います。つまり、「空気」による圧力は、それに従わない者に対して排他的です。よく問題になる日本の同調圧力も本質的にはこれと同じでしょう。「空気」による意思決定が恐ろしいのは、それが決して論理的思考やデータに基づくものではないという点にあります。そして、そのような「空気」の圧力に支配を許してしまえば、一度決定したものに対する議論を許さず、他の不都合な事実を覆い隠してしまうのです。

山本七平によれば、「空気」は日本の

みならず世界の至るところに存在しますが、欧米や中東、中国大陸など、その歴史において常に戦争を経験してきた国は、「空気」なるものに作戦の決定を支配されてしまうと即座に自滅することを知っていたので、それを克服してきたといえます。また、日本においても江戸時代と明治初期の指導者層には「空気」に支配されることは恥であるという意識が存在していたので「空気」による支配はそこまで蔓延していなかったと指摘しています。

しかし明治維新後に近代化が進み、日本は西欧の技術と精神を盛んに取り入れ、科学や論理的思考を輸入し、合理的な意思決定をするようになったかのように見えました。けれど実のところ日本人は、そのデータや論理が示す一部の事実のみを取り上げ、それが絶対的な事実であるという「空気」を醸成し、他の証明されていない部分を覆い隠し、データや論理を悪用（多くは無自覚的に）してしまふようになったのです。このような、表層的で疑似的な西欧の装いを、山本は「疑似西欧的な論理」ないし「西欧的といえる仮装の論理」と呼んでいます。

実際に、先の大戦においても日本軍は「短期決戦でなければ勝てない」という考え方に固執し、個々の作戦においてもそのような志向が支配的になり、持久戦の妥当性は検討されなくなっていました。短期決戦に合致しない情報や指摘は軽視、もしくは無視されるようになりました。そのような日本の志向には「空気」による支配が及んでいたことが『失敗の本質』においても指摘されています。すなわち、「日本軍の戦略策定は一定の原理や論理に基づくというよりは、多分に情緒や空気が支配する傾向がなきにしもあらずであった(277～281頁)」というのです。

「空気」による支配がもたらす排他性

では、なぜ日本では「空気」による支配がここまで強力的なののでしょうか。「空気」による支配の醸成には二つの原則があります。一つは、自己の内なる感情を対象へ乗り移らせ、感情と対象が不可分なほど結びつき、一体化した状態になることです。内なる感情とは、対象を

把握する者の心に存在する善なる感情（崇拜、尊敬、好意など）、もしくは悪なる感情（卑下、恐怖、憎悪など）のことを指します。そして、そのような感情とその対象が固く結びつき、把握者の感情が対象に乗り移ることを、山本は「感情移入の絶対化」と呼びます。

そして、二つ目の原則は、対象への相対的な理解の排除、つまり他の観点から対象を検討、思考することを排除してしまうことです。

このような強力な排他性を帯びてしまうと、それ以上の議論を許しません。軍令部が、戦艦「大和」の特攻出撃を、内なる感情（勇猛果敢に戦っている陸軍への精神的な援護、などの精神論）と結びつけて「感情移入の絶対化」がなされ、最期まで科学的な合理性を唱えた特攻反対派の意見が無視されたのも、山本が指摘するように、特攻出撃が集団心理に基づいた「空気」による決定だったからに他なりません。前述したように、「空気」による決定は、一部の現実を覆い隠し、他の視点（この場合は「大和」の特攻は作戦として体を成さないなどの指摘）を排除してしまうのです。ちなみに、このような「空気」の圧力が持つ排他性は、学校で生じればいじめに、村で生じれば村八分に発展します。

しかし、留意しなければならないのは、問題にすべきは排他的な「圧力」であって、対象へ自己の感情を乗り移らせる行為そのものは、日本人の「察し」と「思いやり」の精神文化と深く結びついているものであり、プラスにも働くということです。日本人には、「自分はこうしてもらえたら嬉しいから、相手にもこうしてあげたい」という、共感性に基づく感性が大きく働くという性質を持っています。それは「おもてなし」の文化にも通ずるものです。このような日本人の感性は、自分と相手は同じだという、人間の普遍的な感情を認めてきたからこそ育まれたものであり、その根底には共感性（同調性）という情感が存在するのです。

共感性を重んじる日本人

日本人は、一言でいえば「感覚の世界」の住人です。日本人は事実（対象）を事実としてありのまま受け止める情感、

共感性を強く持っています。本居宣長は、そのような日本人の性質を「もののあはれ」という言葉で表現しました。宣長によれば、「もののあはれ」の「あはれ」とは、「見るもの、聞くもの、ふるゝ事に、心の感じて出る、嘆息の声」（『本居宣長全集第五巻』116頁）を表します。余計な解釈を差し挟むことなく、「もの」（対象）のあるがままに、心の感じるままに受けとる、それが日本の古意（いにしへごころ）なのです。それは、対象を論理や理屈を差しはさんで評価したり、理解しようとする西欧的な感性（宣長は漢意といって中国の感性との比較をしています）とは、対称的です。

そのような日本人の感性は、長きにわたって自然と共存することによって培われてきたものです。日本人にとっての自然とは、人びとに生きるための恵みを与え、また時として命を奪う存在です。日本人は森羅万象、命を宿しているもの、善悪を問わず全ての「畏きもの」を「神」と呼び、八百万の神々として祈りを捧げてきました。

多神教的な感覚世界と、一神教的な論理世界

意外なことに、この八百万の神々という信仰形態が、日本が他の国と比べて「空気」に支配されやすい、つまり一旦「絶対化」して対象を把握するとその対象に対して相対的な物の見方ができなくなる原因の一要因となっています。

論理的思考を得意とする西欧人は、一神教の世界に生きています。一神教とは、「絶対」なのは唯一無二の神だけだという信仰です。山本は、西欧人は伝統的に、唯一絶対の神以外に対しては、徹底的に相対化して捉える文化があると述べています。日本人は「感覚の世界」の住人だと言いましたが、西欧人は感情と現実を明確に区別し（神学的論争となると話は別ですが）、論理的思考を得意とする「論理の世界」の住人なのです。よって、西欧人の世界は、日本人と比較すると「空気」に支配されにくい構造であると言えるでしょう。

一方で、八百万の神々を信仰し共感性を重んじる日本人は、「絶対化」する対

象が「八百万」のごとく無数に存在します。そしてそのような複数の絶対的对象は、時間の経過によって相対化されます。よって、時と場合によって、絶対的存在はAからBへと直ちに切り替わることができるのです。山本はそのような例として、戦後日本において、絶対化する対象が経済成長、公害問題、資源、と切り替わってきたことを挙げています。そして、山本はこのような日本の場当たりの態度について「その場その場の”空気”に従っての『巧みな方向転換』（山本、74頁）」だと評しています。

日本の政府をはじめ、日本の組織が場当たり主義的な行動に陥ってしまうのは、このような根本的要因があるのです。

日本の帰納的な行動原理

日本の行動原理は、どちらかといえば帰納的だと言えるでしょう。経験主義的だとも言えます。帰納法とは、経験して得た複数の個別的事実から同一の傾向をまとめ上げて、その中から普遍的な法則性を導き出すことです。これは、日本人が事実を事実のままとして受け止める感性と合致するものです。また、帰納的な決定方法は、その法則性を抽出するための事実を複数回経験しなければならぬため、決定に時間がかかります。

一方で、日本と比べて西欧は演繹的なやり方を得意とします。演繹法とは一般的で普遍的な事実を前提とした上で論理的に個別の結論を導き出すことをいいます。演繹的なやり方は既知の普遍的な事実を前提としているので、決定も迅速です。論理的思考を得意とする西欧人との親和性が高い方法です。

明確にわかることは出来ませんが傾向としては、先の大戦における戦略策定の方法も日本は帰納的だったとされますが、日本は本来の帰納法からも逸脱した間違っただ「独特の主観的なインクリメンタリズム」

（incrementarism：政策決定において過去に積み上げた実績を基本として、それに付加、修正、変更を加えて段階的な解決を計る方法）に基づき、他方で米国は演繹的だったと評されています（『失敗の本質』282頁）。勿論、どちらかの方法に偏るのではなく、両者の間には絶え間ない循環が必要であることは言うまでもありません。

日本の政府は今回も独特な帰納的行動パターンに偏っているのかもしれませんが。今回の新型コロナウイルス危機に対し緊急事態宣言が出されてから二ヶ月が経とうとしますが、個別的な対応に終始し、長期的、大局的な戦略は見えてきません。

但し、日本の帰納的な世界観には、長所も存在します。京都大学大学院教授の小倉紀蔵氏は、日本の政府が新型コロナウイルスの対応について後手に回っているのは、言い換えれば強権性の阻止に繋がっていると指摘しています。演繹的な迅速性とは、言葉を変えれば強権性を伴うものです。日本は、迅速性には欠けるけれども、私権の抑制がほぼ行なわれることなく、その場その場の状況の変化に本能的に即応しながら、ものごとを進めているのだという見方も可能なのです。

おわりに

以上述べてきたように、日本という国家、政治システムの脆弱性は、戦前からほとんど変わっていないかのように見えます。そして、それが杞憂に終わらないのだとすれば、その脆弱性を克服しなければなりません。

一方で、本稿で示してきたように、そのような日本の脆弱性の発生は、日本の強靱性の発生と分母を同じくしています。今回は紙面の都合上、日本の強みの部分についてはあまり触れてきませんでした。弱みも強みも、元を辿れば日本人が自然と共存共栄する中で育まれてきた、事実を事実としてありのまま受け止める情感から発せられていると考えられます。そして、そのような日本人の純粋で素朴な感性は、茶道、俳句、禅など、今や世界にも認められている、ありとあらゆる日本文化、そして精神の根底を成すものです。

日本人は、自分の性質が持つ弱みと強みの両方を自らの原点に照らし合わせて把握し、長所を伸ばし短所を補わなければなりません。そのためにはどうしたらいいか。「空気」による支配に抗うためには、常に様々な可能性を排除せず包摂し、多角的な視野で物事を把握する努力をし、思考停止に陥らないことが肝要であると考えます。そして、日本の未来を見据えた総合的で全体的なグランド・デザインを描いていく必要があります。

(文責：筆者)

参考文献

- ・山本七平『「空気」の研究』、文芸春秋、2018（新装版）
- ・戸部良一他『失敗の本質 日本軍の組織論的研究』中央公論新社、1991
- ・本居宣長（大野晋・大久保正編）『本居宣長全集第五巻』筑摩書房、1970
- ・小倉紀蔵「『大陸性』と『群島性』が混淆する半島」『Voice』2020年5月号、PHP研究所
- ・吉木誉絵『日本は本当に「和」の国か』PHP研究所、2019

発行：特定非営利活動法人 外交政策センター Foreign Policy Center (FPC)

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-30-7-502

定価：100円 Eメール：foreignpolicy617@gmail.com

ホームページ：http://www.foreign-policy-center.tokyo

Facebook：https://www.facebook.com/fpc.gaikoseisaku/